

王と月

登場人物紹介

ウェンデル

後宮で暮らす貴族令嬢。
王に気に入られている
真理を目の敵にしている。

イルミ

王宮で下働きとして働く女性。
頼れるお姉さんの存在で、
真理に仕事を教えてくれる。

ユーリス

真理が王の寝室で
出会った謎の美形。
かなり高貴な身分を
持っているようだが……？

イマール

王の一番の側近である、
物腰柔らかな紳士。
王に振り回されて
いつも苦労している。

アルフレッド

アルフレディア国の若き国王。
威圧感あふれる赤い瞳を持ち、
圧倒的な美貌を誇る。
真理を「小動物」と呼び、
強い執着心を見せる。

アイマリ 青井真理

裏山に星を見に行く途中、
異世界にトリップし、
アルフレッド王の胸元に落ちてしまう。
それがきっかけで後宮に入れられ、
何かと王に構われることに。

目次

番外編	王と月
アルフレッド王	
271	7

王と月

プロローグ

晴れた空の下、花の咲き誇る庭園と、ざわめく周囲。

私を取り囲むのは、映画の中でしか見たことのないような兵士の格好をしている人達だ。殺気だつていて、私に鋭く光る剣を向けている。

確か私は裏山に星を見に行つたはず。それが気が付けば、ここはどこ……!?

今の状態を確認しようと、顔を上げた私の視界に飛び込んだのは赤い瞳。

珍しいその瞳の色に、私は思わず魅入る。

すつと通つた鼻筋に、色気を感じさせる一文字に結ばれた口元。

目の前にいたのは、長めの黒い髪を風になびかせ、誰もが見惚れるような美貌を持つ男だった。

だが、その美しい顔はどこか冷たさを感じさせる。

赤く輝く瞳が、静かに私を射抜いていた――

第一章 出合い

それは、高校の卒業式も無事終わり、短大への入学を待つばかりの春休みのこと。私、青井真理は星が大好きで、今日もこつそり家を抜け出し、裏山に星を見に行つていた。

そこは誰にも邪魔されない秘密の場所。夜空の中で浮かび上がる月と星を見ていると、自分の悩みなんで、ちっぽけなことに思えるのだ。

裏山へ向かう暗い夜道も慣れたもので、いつものように月明かりだけを頼りに進む。

ふと何かに違和感を感じて立ち止まった。うまく説明出来ないけれど、なんと言うのだろうか。

周囲の空気が変に冷え冷えとして、落ち着かない。

そう、まるで何かが起こる前触れのような……

急に寒気がして、今日は大人しく家に帰ろうかと悩み始めた次の瞬間、全身に強い衝撃を感じた。

驚く暇も、声をあげる隙もない。

そこで私の意識は途切れたのだった。

気付けば、見知らぬ場所で見知らぬ男の胸の中にいた。

自分の状況をそう理解したのは、男の放つムスクとアンバーの香りを感じたから。

周囲は騒然としていて、何かを叫んでいる。ただ一人、この赤い瞳の男を除いて。初対面の男の胸の中にいると気付いた私は、慌てて男の胸から降りた。地に足をつけた途端、周囲の殺気が一瞬にして私に集中する。中世ヨーロッパの兵士みたいな格好をした男達に、地に縫い付けられるように押さえつけられた。驚きで声をあげることも出来ない。

黒いブーツのつま先が視界に入った。徐々に顔を上げてゆくと、そこには私を冷たい表情で見下ろす、恐ろしいほど顔の整った男がいた。

まだ、私は知らなかったのだ。

この男こそ、この国を総^すべる若き美麗なる王。私の運命を握る、アルフレディア国のアルフレツド王だということを――

それからどこかの部屋に連行され、厳しい質問攻めにあつた。なぜ大事な式典の最中に現れたのかなんて、聞かれてもわからない。むしろ私の方が聞きたいぐらいだ。

『私は日本という国に住んでいて、ただ星を見に出かけただけよ』

何度もそう訴えてみるが、誰も信じてはくれない。そのうち、これは夢だ、もう少ししたら覚めるのだと思うようにした。

しかし、いつまで経つても目が覚めることはなく、尋問も終わらない。嫌でもここが別世界だということを悟らざるをえなかった。かろうじて言葉が通じることだけが、救いだった。

そんな取り調べが一日ほど続いた後、ちよつと偉そうな人物が部屋に入ってきた。私の方には見

向きもせず、兵士に向かつて何かを言うと、すぐさま部屋を出て行く。

「おい、立て」

私は兵士二人に無理矢理立たせられ、部屋を出た。

隣を歩く兵士に、どこへ行くのかと尋ねてみても、答えてはくれない。歩を進めるたびに、緊張と不安で吐きそうになる。

やがて、大きな扉の前で立ち止まった。扉の前にいた兵士は、私達が近づくと、無言で大きな扉を開ける。

部屋の中を見て、眩^{まよ}しさで一瞬、目を細めた。ここはどこかの広間のようだ。高い天井に、豪華なシャンデリアがいくつも並ぶ。広間の中心には赤い絨毯^{じゅうたん}が敷かれている。その先を視線でたどっていくと、部屋の奥に誰かがいるのがわかった。目を凝らして見ていると、急に手首を強く引っ張られる。そう、私の両手首には手錠がはめられているのだ。兵士に引っ張られた反動で転びそうになるも、なんとか体勢を立て直して歩いた。

絨毯の先には数段高い段差があり、そこに王座があるようだ。

そして、その場所に座っているのは、一人の男。王座の肘掛けに頬杖をついている。周囲にも人がいるが、彼以外は皆立った状態で私に視線を向けていた。これから先、何が起こるのかと思ひ、息を呑む。

やがて部屋の中央までたどり着くと、王座に座る人物の顔がはっきりと見えた。

長めの黒い髪に高い鼻筋、整った唇。一番印象的なのは、その瞳が赤かったこと。男は長い足を

組み、一步一步近づくと私に、無表情のまま冷たい視線を投げていた。

「あ……！」

あの時、私が胸元に落下した男だと気付いた瞬間、思わず声が出た。

それが聞こえたのか、王座に座る男は、ほんの一瞬だけ眉をびくりと動かした。

だけど、私の驚きの声はすぐに遮られた。二人の兵士に膝をつかされ、髪を掴まれたかと思っただけ、無理矢理顔を上げさせられたのだ。あまりの力の強さに顔が歪む。

「王、尋問が終わりました。この娘は我が国の人間ではないようです。時折現れるという、異世界人なのではないでしょうか」

王？ この若い男が王なの？ 聞こえてきた言葉に、私は耳を疑った。

王と呼ばれた男は、燃えるような赤い瞳を私に向け、半端ない威圧感を放つ。周囲とは明らかに違う雰囲気、彼が私のこれからの運命を握っているのだと、容易に想像がついた。

この人に、許しを請えばいいの？ いきなり胸元に現れてごめんなさいって。

言い訳をすればいいの？ 何も知らなかったのって。

それとも、媚びればいいの？ お願ひ、許してって。

いろいろな言葉が頭の中をぐるぐると回るけれど、髪を乱暴に掴まれた状態では、冷静に考えることが出来ない。何だって、いきなりのこの仕打ち。

もうちょっと人間扱いしろ！ 私の髪を掴む兵士に叫んでやりたくなる。

痛みを顔にしかめっていると、それまで座っていた男——王が動いた。



椅子から立ち上がり、一步一步近づいてくる。

艶のある黒髪に、赤い瞳——それがまるで夜空に輝く珍しい星に見える。あまりに綺麗で目をそらせずにいた。

王は私の前まで来ると、静かに立ち止まる。

こちらを見下ろす視線からは、冷酷さしか感じられない。

「お前のその余裕な態度は何だ。何を見ている？」

つと、冷たく感じる低い声で問われ、私は体を震わせた。

ここは『あなたがあまりにも綺麗で見惚れていました』と本音を言い、媚びればいいのかもしれない。

だけど、そんなことはしたくないと思った。だいたい私だって自分の状況が把握出来ていないのに、この対応はあんまりじゃないの。

「……別に」

思わず反抗的な態度を取ると、兵士に髪をさらに強く引つ張られて、悲鳴をあげそうになる。

しかし、必死に声を殺した。こんな理不尽な暴力を受けるいわれはない。

私の反抗的な態度を見て、王は初めて口の端を上げて笑った。目を奪われるほど魅力的な笑みだけど、なるべくかわりたくはないと直感した。

だって、あの目は捕食者の瞳。あの赤い瞳に決して近寄ってはならないと、私の本能がそう告げている。

そう思っているのに、なぜだろうか。視線をそらすことが出来ない。

「どう処分しましょうか」

兵士が王に問う。やはり私の運命は、この王と呼ばれた男が握っている。私の背中を冷や汗が流れた。

先程取った自分の反抗的な態度を悔やむけれど、もう遅い。尋問の最中、兵士から聞いた話を自分の中でまとめたのだけ——大事な式典の最中、いきなり私が空から現れ、やむなく式典は中断されたとのこと。しかも落下した先が、この国の王の胸元だったというのだから、笑えない。

不敬罪は確実だろう。この国には、死刑制度はあるの？ それとも奴隷扱い？ 牢屋行き？

私の頭の中で、悪い想像が駆け巡る。だって、さっきの王の微笑み。あれは絶対嫌なことが起きる前触れだ。時たま、私は自分でも嫌になるぐらい勘が鋭くなる。そういう時は、たいてい当たっていた。それも悪い予感の方ばかり。

冷や汗をかきながらも、それを気取られないように、王に目を向けたまま彼らの会話を聞く。

「時折現れるという、異世界人。はるか昔に、王族の一人がその知恵によって命を救われた恩義がある。それ以来、手厚く扱うようになった」

王は首を少しかしげ、面倒臭そうに言い、美麗な顔を歪めた。

「今、また現れるとは、面倒なことよ」

私だって好きでこんなところに来ていた訳じゃない。そう言いたいけれど、髪にかかる力が強く、呼吸をするだけで精いっぱいだ。

王は、一度天井を見上げると、再び私に視線を戻して言った。

「たまには毛色の違う女も面白いものだ」

予想もしなかった言葉に、私は驚きのあまり口を開けた。

面白いつて私のこと？ ……何の処罰もされないの？ このまま見逃してもらえないの？

これからの明るい未来が見えた。

顔には自然と安堵の色が浮かんでいたと思う。

次の瞬間、王の冷たい声が聞こえた。

「後宮へ入れる」

後宮？ 何それ。そこで私に何をしろと言うの？ 聞き慣れない言葉に私は動揺する。本で読ん

だことがあるけれど、確かその場所は――

自分の未来が暗くなる予感に、身震いがした。

すると、奥に立っていた初老の男性が声を荒らげる。

「ですが、王！ 後宮は王の正妃や側妃を住まわせる場所。いくら異世界人を保護する習わしがあるとはいえ、素性のはっきりしない人間を後宮へ召し上げるなど「反対です！」

私だって後宮へなど行きたい訳ではない。むしろ行きたくない!!

「俺とてバカではない。誰が好き好んでこのような女に手を出すものか。それに――」

そして嘲笑うかのように、冷たく言い放った。

「病気でもうつされると困る」

それを聞いた瞬間、頭に血が上った。頬が熱くなり、髪を掴まれた体勢のまま、私を見下ろす男を睨み付ける。

誰が病気持ちだ……！ 失礼にも程がある。ああ叫んでやりたい。

私はまだ清い体なのだ!!

後宮で、女をいっぱい囲っているのなら、あんたの方が病気持ちかもしれないじゃないか。一緒にするな!!

しかし、それを言葉にすることは出来なかった。さすがにそんなことを叫んだら命がないと、本能で理解している。

だけど、口の端を噛みしめ、思い切り睨んでいたのも、言葉にしなくてもわかっただろう。

王は、私の怒りが逆に面白いとでもいった様子でせせら笑った。

「そのような目を俺に向けるとはな。――俺を十分楽しませろ」

王の一言で、私の処遇が決まった。

こうして私は後宮に移され、女官長からここでの決まりを教えられた。

後宮内と城の特定のエリアは基本自由に動き回っていいそうだ。また、この世界の知識を得るためということ、図書室への入室も許可された。

「王の夜伽のお相手は、あなたにはまだ出来ません。色々と学んでからになります」

女官長の言葉に、私は胸をなで下ろした。そんな私に女官長は、一冊の本を差し出す。

「まずは、これを全部読むように」

私は手渡された本を受け取り、パラパラと開いて中を見た。異世界の字が読めることに安堵して、次に内容を確認する。

「これは……」

驚きのあまり声が上がらず、そのままぶっ倒れるかと思った。なんだ、この本は。寝所でどういった行為をすれば男性を喜ばせることが出来るなどといった内容が、こと細かく書いてある。しかもご丁寧絵の解説付きだ。

すると女官長はにこりともせず、真面目な顔で答えた。

『お勤めの心得』です」

「……後で読みます」

動揺しながらもそう答えたけれど、最初の数ページを開いただけで挫折した。読む気にもなれなかつたし、これらの知識が自分に必要だとも思わなかつた。

そうして、実は全てが夢だったというオチになることもなく、淡々と毎日が過ぎていく。

しばらくして気持ちが落ち着いてくると、ふと考えた。

ここでは三食つきだ。昼寝だつて出来る。個室だつて与えられている。後宮に入れられるなんて最悪だと思つたけれど、外に放り投げられたり、不敬罪で死刑にならないだけ、幾分ましかもしれない、と。生きているからこそ、元の世界に帰れるかもしれないという希望を持てる。

ちなみに、尋問のあと広間に連れていかれた日以来、あの王と呼ばれる男には会つていない。も

はや私のことなど忘れているのだろう。私のことはただの気まぐれで生かすと決め、とりあえず後宮に放り込んだだけに違いない。だいたい後宮のお勤めなんて、貧相な私には無理だ。

後宮には、綺麗なお姉様方が大勢いらつしやる。

身分の高いお方は自分専用の侍女をつけているが、私は下っ端のペーパーなのでそんな人がある訳もない。

私は誰とも接することなく、ひっそりと地味に生活していた。

特に何事も起きないまま時は過ぎ、気が付けばここに来て、もう一カ月が過ぎていた。

夜になり、部屋の窓を開けて空を眺める。

この世界の夜空も、私のいた世界と同じく星が輝いている。月だつて変わらない。

日本の星座みたいに、星の位置に意味があるのだろうか。そう考えながら、シヨールを羽織り部屋から抜け出した。

花の咲き誇る後宮の庭へと歩を進める。静かな広い場所で、星を眺めたかったのだ。

広い庭で芝に寝転がる。多少、芝が刺さつてチクリとしたけれど、構わない。大の字に広がり、満天の星空を瞳に映す。

あの夜、星を見に行つて、私はこの世界へまぎれ込んだ。

だからまたこうやって星を眺めていれば、元の世界に帰れるんじゃないだろうか、つて淡い期待を抱いてしまう。もつともそれは都合の良い考えであつて、女官長によると異世界人が元の世界に

帰ったという話は聞いたことがないという。その時はショックで数日泣き暮らしたけど、今では気持ち切り替えている。

この世界で生きていくしかないのなら、自分の居場所を見つけない。きちんと手に職をつけるなり、なんなりして、自立したい。そうして後宮から出たい。後ろ盾どころか、知り合いすらいない私が頼れるのは、自分だけだった。寂しいなんて思っている暇はないのだ。

やがて、何をすることもなく、ただ時間だけが過ぎていく毎日が退屈でたまらないと感じ始めたのは、この世界に慣れてきた証拠だろうか。

そんなことを考えながらふと横を見ると、何か視線の端を横切った。ん？ と思い、目を凝らせば、何か茂みの中で動いているのがわかる。白い毛の、小さな生き物のようだ。

何だろう、野生の動物？ 私はゆっくりと起き上がり、茂みまでそろそろと近づいた。

しかしどこにもいない。私の間違ったのかしら。いや、そんなはずはない。確かに見えた。その時、急に風が吹いて、私の髪の毛をさらった。

ぼさぼさになった髪を手で押さえつけていると、後方から視線を感じる。不思議に思っただけなのに顔を向ければ、そこには人が立っていた。私は、思わず息を呑む。

高い身長に美しい顔立ち、そして何よりも印象的な、私を見つめる赤い瞳。

あつ——

それは、私を後宮に入れた張本人——すなわちこの国の王だった。

なぜここにいるの？ よく考えれば、ここは後宮だから王がいて当たり前なのだが、それを忘れ

るくらい驚いてしまった私は、ただその場でたたずんでいた。

相手も何も言わずに、無機質に輝く赤い瞳を私に向けている。

どうしよう、この場合はどう対応すればいい？

「何をしている」

意外なことに、先に口を開いたのは王だった。私は内心、動揺しながらも答える。

「その茂みに」

指を差したあと、挨拶もなしに話をするという自分の態度が非礼に当たると気付いた。だけでも遅い。

「なんだ」

ヒヤヒヤしていた私に対し、王はそれを咎めることなく答える。私はほっとして続けた。

「小さな動物が走った気がして……」

「小さな動物？」

私はうなずいた。確かに見たのだ、夜の闇でもわかるほどのふわふわの白い毛を持つ——そう、リスみたいな小さな生き物を。しばらくすると王は何か思い当たる節があったのか、ああと小さく呟いた。

「それはきつとリイムという野生の動物だ」

「リイム……」

見た目だけでなく、名前も可愛い。もっと明るいところでリイムを見てみたい。愛らしい生き物

と戯れるところを想像して、私は笑顔になった。

「クッ——」

突然、王が笑い出した。

それも私の全身を眺めたあとに、だ。何だか感じが悪いと思つたが、特に文句も言わず黙っていると、王が口を開いた。

「お前に『小さい』などと言われるとは、リイムも不本意だろうな」

私は一瞬呆気にとられたものの、すぐに目の前の人物をキツと見据える。

好きで小さい訳じゃない、私のコンプレックスを刺激してくれるなど、目に力を込める。唇の端を噛みしめていたので、自然と険しい表情になつていたと思う。

王はひとしきり笑つたあと、ふと何かに気付いたかのようにまじまじと私を観察した。そして思ひ出したと言わんばかりの顔をする。

「——そうか、お前か」

王の赤い瞳が、次第に捕食者の色に変わつて輝き出す。それを見て、本能的に危険だと感じた。身を強張らせた私に、いきなり王が近づいてくる。

そして私の顎を掴み、無理矢理上を向かせた。顎にかかった力が強くて、思わず顔をしかめる。

「反抗的なその目……お前、あの時と変わつてないな」

絡みあう視線の先には、赤く輝く瞳。のぞき込むと、まるで吸い込まれてしまいそうな錯覚に陥るほどの強い力を感じる。

時間にすればほんの数秒だったのかもしれないけれど、私には数時間にも感じられた。

王の背後で輝く月が綺麗だと思いつつも、視線を受け止め続ける。

しばらくすると、顎から手が離れた。

今だ！ これ以上深くかかわる前に、この場を走り去ることに決めた。

「失礼します」

「では、またな。——小動物」

小動物とは、私のことか。

背後から掛けられた声にカチンときて、振り返つて睨んでしまう。

王は私の反応を見て、笑みを浮かべていた。そう、言うなれば底意地の悪そうな、とんでもない悪戯を思い付いたような、そんな笑顔。美麗な顔をしているだけに、背筋がぞくりとくるほど恐ろしく感じた。

その後は急いで部屋に戻つた。早々に眠りについて、今夜の出来事は忘れてしまいたかつたのだ。——この国の王の名はアルフレッド王。黒髪に赤い瞳を持つ、二十三歳の若き王。

背も高い容姿端麗。女性には不自由しないだろうし、そのうえ後宮には、わんさと美女がいる。私を後宮に入れたのは、ただの気まぐれ。きっともう会うことも……いや、視界に入ることさえないだろう。そう自分に言い聞かせる。

しかし、運命は残酷だった。

翌朝、女官長の部屋に呼び出され、唐突に告げられる。

「今夜、王があなたのもとを訪れます」

私にとつては死刑宣告も同然の言葉に、一瞬反応出来なかった。それでもやっとの思いで、震える口を開く。

「な、なぜ……ですか」

「理由は知りません。王の決定だからです」

女官長に冷たく一言ではね除けられた。その後、女官長からいくつかの注意事項を受けたが、私は上の空だった。

ひと通り話し終えた女官長に私は無言で一礼をすると、唇を噛みしめたまま部屋を出る。後ろ手で扉を閉め、深いため息をついた。

昨日の夜、勝手に部屋を抜け出して星なんて見に行ったから、王に目をつけられた。規則を守らない私に罰が当たったのだ。

大人しくしていれば、こんな未来は避けることが出来ただろうに。

そのことを心底悔やんだけれど、もう遅い。

——いや、待てよ。私には最後の切り札が残っている。それがあつた限り、当面は逃れられるはずだ。

自分自身に言い聞かせ、沈む気持ちをなんとか奮い立たせた。

夜になると、部屋に入ってきた侍女に、湯あみに連れて行かれた。湯を浴びせられ、痛いぐらい

に体をこすられる。そして無理矢理薄手の夜着を着させられ、化粧をされた。

王を迎える準備が整うと、部屋に一人残される。

私は侍女が退室するとすぐにクローゼットを開けて、いつもの夜着に着替えた。こっちのほうは動きやすいし、厚めの素材なので、体の線が露わになることはない。

あんなに透け透けの、いかにも誘っています的な夜着など着られる訳などない。

ふと、部屋中に広がる甘い香りに気付いた。

匂いの元をたどって見ると、ベッドの側から白い煙が立ち上っている。お香だ。

このせいで、部屋中に甘ったるい花の香りが漂っているのだ。侍女が用意したのだろう。これまで一度だって焚いたことなどなかったくせに。

わざわざ用意してくれたのに申し訳ないけれど、お香は水差しの水をかけて消した。

ジュツと小さな音を立てて消えたお香の火——たやすく消すことが出来るこの存在は、まるで今の私のようなのだ。それは事実だけど、考えないようにして頭を横に振った。

新鮮な空気を入れるため、窓を開ける。

開けた瞬間、風が吹き込み、夜着がはためく。冷たい風が頬をなで、夜の香りが鼻をくすぐる。

この部屋に漂う甘い香りを、全て消し去りたいと思った。

まもなくして部屋の扉が開く音が聞こえる。一瞬、体に緊張が走ったが平常心を保ち、私はソファに座ったまま窓から見える夜空を見ていた。もちろん出迎えることなんてしない。

気配で誰かが部屋に入ってきたのがわかったが、私はわざと視線を投げずにいた。

きつと私を見ているだろう。見られていると、肌で感じていた。

「——いたか」

低い声が聞こえる方に、ゆっくりと顔を向けた。

薄暗い部屋に溶け込む黒い髪。瞳は赤く輝き鋭い。そして通った鼻筋。高い身長に引き締まった体つき。——王だ。

全身から放つ威圧感には王者が持つ証だと思ふ。何ものにも屈しないオーラに圧倒されそうだが、私にはそれに負けないよう返事をする。

「いるしかありません」

だいたい後宮に私を閉じ込めたのは、王自身じゃないか。

薄暗い部屋に沈黙が落ちる。

やがて王は、私を真っ直ぐに見つめ、何かを考えている様子で口を開く。

「お前の名は？」

素直に答えたくない。だけど、ここで無視する訳にはいかないとわかっている。

しばらく黙った末、私はポツリと呟いた。

「……アオイ」

本名、青井真理。

フルネームではなく、苗字だけを答える。嘘を言っている訳ではないのでいいだろう。

しかし我ながら小さな反抗だ。自分の器の小ささに自嘲気味に鼻で笑う。

「まあ、名など、どうでもいい。すぐに忘れる」

なら、聞かないでよ！

喉まで出かかったが、その言葉をなんとか呑み込んだ。

王は部屋の中央まで堂々と歩き、ソファに腰かけていた私に再び視線を投げる。赤い瞳に射抜かれて、一瞬心臓が跳ねた。王が静かに言う。

「早く服を脱げ」

事務的で感情の欠片すら籠もらない静かな声。

「無理よ」

私が即答するも、王は表情を変えず、冷たく見下ろしてくる。

「だって、何度もしつこく言われたもの。この後宮を取り締まるという女官長に」

後宮に入れられて早々、私は後宮の心得というものを女官長より叩き込まれた。

まず第一に月のものが来なければ王の相手をしてはいけない、ということ。

後宮に入った時点で妊娠していないと、証明しなければいけないのだ。過去に、妊娠していたのに後宮入りして、王の子と偽って産もうと目論む女性がいたらしい。だけど、後宮だってそんなにバカじゃない。月のものが来た時点で第一関門突破とみなし、初めて医者を呼んで病気等の検査をするそうだ。王の相手をするのはそれからになる。

私は元からすごい生理不順だったので、この環境の変化に体がついていけないはずがなく、生理はまだ来ていない。この時ばかりは助かったと安堵した。

だから侍女が焚いたお香や透けている夜着——ましてや王の訪れなど意味がないのだ。

女官長には『王が部屋に訪れたら、早々に辞退を申し上げるように』と、かなりしつこく言われた。そこまで言うなら、女官長が事前に断つてくれたらいいのに、王の決定には異を唱えられないらしい。

つまり、王の相手をしてはいけない。だけど王の訪れを拒否は出来ない。まったく、なんて面倒な決まりなんだ。

しまいには女官長は『口や手を使つての奉仕もダメです』とまで言い出した。誰がするか、そんなこと!! 後宮の人間はどうしてこう、王の訪れが喜ばしいことだと決めつけて疑わないのだろう。『今のあなたに出来るのは、王のお話し相手ぐらいです』

何の面識もない王と、何を話せばいいというのか。女官長も、無理難題を吹っ掛けてくれる。こは早々に、王にお引き取り願おう。

「私には王のお相手は出来ません」

はつきり簡潔に言った。本当ならば、

『王の訪れは大変嬉しく身に余る光栄です。しかしながら月の訪れを待つ身です』

と言うべきだと、女官長に何度も練習させられたのだけど、何の役にも立たなかった。

王は鼻で笑うと、まるで興味が無い様子でベッドに行き、腰を下ろしながら口を開く。

「なんだ、後宮の決まりを知っていたか。つまらん反応だ」

その言い方を聞くと、私がどう反応するのか様子を窺っていただけのように聞こえる。王の相手

が出来ようと出来まいが関係ない——そんな態度に、少しだけほっとした。それならちよいどいとばかりに、いつの間にかベッドを占領し始めた王に声をかける。

「他の女性のところへ行つて下さい」

『今宵は他の花々を愛しみ下さい。私はこの身が王を迎える準備が早く整いますよう、祈りながら眠りにつきます』

またしても女官長から練習させられた台詞が無駄になる。こうなったら気力で生理を遅らせたい。

「他の女のもとへなど行かん」

「なぜですか」

「あいつらは、媚びることしか知らん。子種を誰よりも先に頂こうと必死でな。精のつくという得体の知れない飲み物や媚薬まで用意して熱心なことだ」

なんとという、肉食女子軍団。その必死さが恐ろしくて笑えない。

「そして、いったん始まると、淑女の仮面を脱ぎ捨て、自ら跨り豪快に腰を振る。下から眺めていると、その姿は本性むき出しの動物だと感じる」

「……」

「毎回の女も薄い夜着でしなをつくつて、全力で誘う——ご苦労なことだ」

薄い夜着とは、先程私も着せられた夜着のことだろう。王は、床に落ちている薄い夜着に視線を向けた。

「お前は脱いだのだな」

「ええ。私には必要ありません」

私には、この着なれた夜着がちようどいい。

「たとえその薄い夜着を着ようとも、お前に手を出そうとは思わん」

眉根を寄せ、吐き捨てるように言った王の台詞。それを聞いて、心の底から安心した。

「安心しました」

「……変な女だな」

「では、ご自分の部屋にお帰り下さい」

もう用は済んだとばかりに、王を追い立てる。

「それは無理だ。今日はここに泊まると言っている」

なん だ と！

本音を言えば、王に帰って欲しい。しかしここで王を無理矢理追い出して、女官長に叱られるのは困る。それならこの一晩だけ我慢しよう。

ただ目下もっか一番の問題は、ベッド以外寝る場所がないことだ。ああでも、私が今座っているソファは大きいので、大人一人くらいなら眠れるだろう。

「では、ソファで寝て下さい」

「……俺がか」

そりゃそうだ。ここは私の部屋。勝手に訪ねてきてベッドを占領されては、たまったもんじゃない。

「人間はソファでは眠れん」

なんだと、私は人間じゃないとも言いたいのか。

「私だって人間です」

「そうか。初めて見た時は、小動物かと思った。その小さき体ならソファでも十分だろう」

人が気にしていることを……!! 意地悪く鼻で笑う様子は、絶対私をバカにしている。

日本人の平均身長より低い私だけど、それで一五〇・五センチある!! 胸を張って言いたいのが、何ぶん相手が悪い。だいたいこの世界の人達が大きすぎるのだ。男性はおるか女性だって、私より頭一つ分高い人達が大勢いる。

コンプレックスを刺激された私は、薄暗闇だというのもあって、遠慮なく睨んだ。

「小動物のくせに怯ひるまず、必死に牙きばをむく、その態度が珍しい」

王は淡々と口を開き、私の顔を見る。そしてせせら笑った。

「——命知らずな」

薄暗闇の中でもわかる程冷たく感じる端正な顔立ち。その体軀たぐから発せられる威圧感。視線を投げられただけで、囚われた気持ちになる。

「では共に眠るか？ 小動物がゆえ、二人でもこのベッドで十分眠れるだろう」

王が静かに手を差し出してきた。

冗談じゃない。一緒に寝てどうすると言うのだ。いくら私でも、ただ二人で寝るだけだと思うほど、バカじゃない。

私は即座に嫌な顔をして首を横に振り、背を向けた。このまま無駄に会話を続けるよりも、あきらめてソファで眠るほうがいい。

今夜一日だけの辛抱だと自分自身に言い聞かせながら、私はソファに横になり、静かに眠りについた。

翌日、目覚めるとすでに王の姿はなかった。私は何事もなかったことにほっとした。しかし、いつの間に部屋から出て行ったのだろうか。全然気付かなかった。元よりお見送りをする気もなかったので別にいいけれど。

ソファで寝たから体が軋むんじゃないかと思っていただけ、まったく大丈夫だった。やはり後宮にあるソファは上質だから疲れないのだろうか。それとも私の体のサイズは、ソファで十分ということか。自分で思ってたちょっと悲しくなった。

それにしても、問題だった夜伽の件も何もなくてよかった。

私は窓を開け、空気を入れ替えた。昨日までの心配しすぎていた自分を思い出すと笑いそうになる。朝日を浴びながら、私は気持ちよく伸びをした。

その後朝食を取り、日課になっている図書室に向かう。その途中、背後から侍女に呼び止められた。聞けば女官長が私を探しているとのこと。何の用事だろうかと不思議に思いつつ、女官長の部屋を訪ねた。

「え……今夜もですか？」

思いつきり不機嫌さを露わにした私に、女官長は努めて冷静な表情で返してきた。

「ええ、今夜も王の訪れがあります」

「……」

おかしい。

聞き間違いかと思つて再度聞いてみるが、間違いではないらしい。

なぜまた私の部屋に来るのだろう、王は。何をしに来るのだ。せつかく今夜はベッドで眠れると思つていたのに。

腑に落ちないが、女官長だつてそう思っているに違いない。私が王の相手を出来ないの知つているはずだ。

「くれぐれも粗相のないように」

きつく言われて、私は洪々とうなずいた。

やがて太陽が落ち、周囲は夜の闇に包まれる。

昨日と同じ時間帯に部屋に入つて来た王の姿を確認し、私は口を開いた。

「なぜ、王は私の部屋に来られるのですか？」

直球で聞いてみる。なぜなら駆け引きは苦手だからだ。

「だつてご自分の部屋は、ここより広いのでしょうか？ なぜわざわざ来られるのですか」

「女のもとへ通えと頼む奴らへの目くらしだ」

「だつたら……」

ほかの女性でもいいのでは？ そう思っていると――

「ただの暇つぶしだ」

王は面倒臭そうに呟くと、昨夜と同じく私のベッドを占領し始めた。

暇つぶしの相手が、なぜよりによって私なの！

そう思いつつ抗議するのも面倒になり、私はソファに丸くなったのだった。

翌日、ソファで目覚めた私は、ムクリと起き上がり、周囲を見回した。

ベッドを見るとすでに王の姿はなく、出て行ったのだなど、ぼんやりと思った。

そしていつもと変わらない毎日がやって来る。顔を洗い、朝食を食べ、ただ時間をつぶすだけの日々。この暇な時間を、もつとこう生産的な何かに費やしたいと思う。

後宮にいるという時点で、女性の存在意義は王の夜伽の相手なのだろうけど、私は違う。

ここで長い時間をダラダラと過ごすより、何か目標に向かって進みたい。

元の世界に帰れないかもしれないと知った今は、なおさらその思いが強くなっていった。

そう、手に何らかの職をつけたり、知識を増やしたりすれば、後宮から出た時、街で暮らしやすくなると思う。人生の方向を決めるのに、何かしら特技の一つでもあった方が絶対にいい。

後宮で過ごす時間を有意義に使えないかと考えながらも、時間だけが過ぎていくことに焦りを感じる。

ただどこ最近は、大きな変化があった。

初めて王の訪れがあった夜から、ほぼ毎日王が私の部屋に通って来るようになったのだ。

夜伽の相手はもちろんのこと、特に何をするでもない。あえて言うなら少々会話をするぐらいだ。

そのたびにベッドを占領されるので、私の寝場所はソファで定着してきた。最近ではそれに慣れてきたので、最初の頃よりも気を張らなくなっていた。

そんな時、女官長から呼び出しを受けた。

「来週、夜会があるので、準備をしておくように」

「夜会？」

「お忙しい王が、後宮の女性達と触れ合うことが出来る場です」

言わば皆が揃って、王と顔合わせを行うということだろう。別に私は今さら王と顔合わせをする必要はない。だって、夜になれば部屋に来るのだ。

欠席したいという気持ちだが、顔に出ているのだろう。私の表情を見て、女官長が先手を打ってくる。

「出席は必須です。夜会の準備のため、仕立て屋や宝石商が来ています。ドレスの採寸をし、装飾品を選ぶように」

面倒だと思いつつも、女官長に逆らう訳にもいかず、言われるがまま指示された部屋へ向かう。

そこには仕立て屋や宝石商が集まっていて、大勢の女性達が彼らに群がっていた。

華やかなドレスに、輝く装飾品。選んでいる女性達は皆、真剣な表情をしている。そんな場に分がいに、どこか場違いだと思いつつ、まず初めにドレスの採寸をした。

「シンプルなデザインで、あとはお任せでお願いします」

それだけ頼み、早々に採寸を終わらせた。次に装飾品を選べと言われたが、あまり派手なものをつけたくない。かといって何もつけないのは、それはそれで寂しい気がしたので、小さなパールイヤリングとお揃いのネックレスだけを選んだ。

そうしてやっと解放された私は、図書室へと向かった。

暇なので、とりあえずこの世界の知識を少しでも増やそうと、毎日通っている。誰も教えてくれないので、本から知識を吸収するしかないからだ。幸いなことに、この世界の文字も読めるし、言葉も通じる。言葉が理解出来ていなかったら、不幸の底から更なるどん底へと落ちていただろう。

庭園を横切り、目的地を目指していると、前方に何やら人が集まっているのが見えた。華やかに着飾った女性が数人集まっているようだ。きゃあきゃあとはしゃぐ声が嫌でも耳に入ってくる。そして、その中心にいる人物を確認して私は眉をひそめた。

——王だ。

周囲の女性より頭一つ分高いので、ここからでもよくわかる。

なぜここで出会ってしまったのだろう。私はこのルートを選んだことを後悔した。かといって、ここで回れ右をするのも気が引ける。どうしようか悩む私に、女性の高い声が飛び込んだ。

「王の剣技の腕前は、とても素晴らしいという噂ですよ」

「ええ、私も聞きましたわ！ お時間のある時、ぜひご披露お願ひしたいと思っておりますの」女性達の王を持ち上げる声が入ってきた瞬間、私は元来た道を引き返すと決めた。

下手にかかわりたくないという自分の感情に素直に従おうと思ったのだ。

しかし立ち去る前に、話の中心にいる王の態度は果たしていかげなものかと、ふと興味が湧いた。右からも左からも褒めちぎられて、さぞやドヤ顔で踏ん返り返っているに違いない。

だけど、王の顔を見ると、予想と反して無表情だった。まるで、飽き飽きしているという感情を押し殺しているようだ。

しかも最悪なことに、王と目が合ってしまったのだ。

思わず『げっ』と口に出しそうになったが、私はそのまま会釈をしてやり過ぐす。不興を買わないよう、こっそり立ち去るのはやめ、控えめにその場を通り過ぎることにした。

「ぜひ、拝見したいですわ。ねえ皆さん？」

「ええ、ぜひ見せて頂きたいですわ」

集団の力は恐ろしいぐらい強引だ。聞いているとまざまざとそれを感じる。

「あなたもそう思うでしょ？」

声をかけられたのが自分だと、数秒遅れて気付いた。急に話を振られても、どう答えるのがベストなのかなんてわからない。焦り始めた私を見て、声をかけてきた女性が再び続けた。

「王の素晴らしい剣技を、あなたも見たいでしょう？」

この女性は、たまたま通りかかった私も味方に引きずり込もうと決めたようだ。冗談じゃない。王に群がる女性の輪に入ってしまったまるものか。そう思った瞬間、つい口にしていた。

「いえ、私は結構です」

その時の空気を、私は一生忘れないだろう。

目を見開いた女性達から『何を言っているの!!』と言わんばかりの、非難の視線が向けられる。女性達の背後から怒りのオーラが噴き出すのを感じて、直視出来ない。

「図書室に行きたいので、このまま失礼します」

失敗した、早くこの場を立ち去るべし!! 瞬時に判断を下し、対処する。

そうして頭を下げたあと誰の顔も見ずに、まるで脱兎のごとく、その場から離れたのだった。

夜になり、今日も王は私の部屋を訪れた。

私としてはベッドを占領されるので、はっきり言ってごめんこうむりたい。

言葉には出来ないが、態度には出ていると思う。そこは変な自信がある。早く私の態度を察して出て行ってくれないものだろうか。

ソファで月明かりを浴びながら、うとうとしている私に低い声がかげられた。

「小動物、今日は何をしていた?」

「……特には」

眠たいのに声をかけないで欲しい。

それに、このところベッドで寝ていないので、少し機嫌が悪いのだ。いつまで占領する気なのか。もう、このソファの方が、体に馴染んできてしまいそうだ。

「特には……か。俺にそんな口を利くのはお前ぐらいだ」
怒るでも呆れるでもない王の声色は淡々としている。

「お前は今日、まんまと逃げたな」

昼間の庭園の様子を思い出したのか、王は口を開いた。

「あの時流れた空気と、引き撃った女達の顔。お前は空気を読むということが苦手らしいな」

王は美麗な顔で口の端を歪め、笑っている。確かに自分でも、もうちよつと上手い言い逃れをすればよかったと悔やむところだ。だけど咄嗟に、ああとしか答えられなかったのだ。

「不敬罪で首を刎ねられるか、無一文で外に放り出される可能性もあった。それを不問にしたのだ。お前は、俺に感謝こそすれ、逃げる必要などないはず。なぜだ」

「逃げている訳ではないのですが——」

正直、面倒なんですと答えられたら、どんなにいいか。

「ではなんだ」

「会いたいとも思えないので」

素直に答えてしまうと、王は少しだけ目を見開いた。しまったと思ったが、もう遅い。今日の私は本当に失言が多い。

ただど王は特に気にした風もなく、話題を変えてきた。

「お前は何に興味がある?」

「……」

急に聞かれても答えられない。

「女官長より聞いたが、お前は本が好きなのか？ よく本を読んでいると聞いているが」
そう言われて、ぼんやりとうなずいた。

ここは異世界だ。自分が常識だと思つていても、通用しない場面もあるだろうから知識を増やすために必要なのだ。それに、本を読む以外、今の私にはすることがない。

静かな部屋に、どこからか虫の鳴く声が聞こえてくる。

その小さな音を澄ませていると、突然、王に聞かれた。

「ところで月のものはきたか？」

はあ!? そんなこと聞いて、どうするのよ!?

思わず叫びそうになつたが、その感情を表に出さないように平常心で答える。

「いえ、まだですが」

そもそもなぜ、私の月のものに興味がある。女性にストリートに聞きすぎだろう。

もともと女性として扱われていないと思うので、単に小動物の体の構造がどうなっているのか気になるのだろうか。あいにく、生活環境どころか世界環境さえも一八〇度変わった私にとって、ストレスは最高潮だ。この世界に来て二カ月が経とうとしているが、月のものがくる予兆もない。

この調子で月のものなんて、来なければいい。
そう思いながら、今夜もソファで眠りについた。

第二章 夜会の夜

ついに今夜、夜会が開かれる。

そこでは後宮の女性達が綺麗に着飾つて王を囲み、広間で食事をしたり、ダンスを踊ったりするのだそうだ。それが定期的に行われていると女官長が言っていた。

日頃忙しい王が、大勢の後宮の女性達と触れ合える貴重な時間とのことで、彼女達はなんとか王の目に留まろうと皆が必死だ。

私もこの日のために採寸してもらつたドレスに袖を通す。

いたつてシンプルなデザインドレスは、薄いクリーム色で、腰回りのリボンベルトにポリウムがあり、華やかで気品のある逸品に仕上がっていた。

お任せでお願いした結果だけど、出来上がったドレスは十分に可愛かった。そこにパールのネックレスとイヤリングをつけて、薄く化粧をする。自分でも、普段よりはまあ見られるようになったかなと思ひながら、広間へ向かった。

豪華な広間には、着飾つた後宮の美女が集まっていた。私とは比べ物にならないぐらい皆スタイルがよく、それぞれの美貌を最大限に引き立たせるドレスを着ていた。

私が少し着飾つたところで、元より美に命をかけている人達の足元にも及ばない。今さらながら

苦笑する。香水と化粧の香りでむせかえる空間の中で完全に場違いだと感じつつ、私は壁際に移動した。

夜会は立食形式で、皆が好きな料理を皿に取りわけ、飲み物を手に会話を楽しんでいた。私はというと、会話をする相手がいるはずもなく、完全なる一人ぼっち状態。それも慣れているので、食べることに没頭していた。

しばらくすると奥の扉から、着飾った男の人達が入ってきた。その瞬間、広間が緊張した空気に包まれる。

やがて二人の男の手で押さえられた大きな扉から姿を現した人物に、広間にいる全員の視線が集まった。

黒地に刺繍の入った上着を着こなしたその人物は、赤いマントを羽織っており、黒と真紅のコントラストが際立つ。絨毯の上を堂々と歩く姿は、周囲の人間とは別格だと感じる。

どこか人を寄せ付けない雰囲気を持つその人物は、王だ。

先に入室した男の人達は、王座へと続く道を挟んで並び、中央を歩く王に頭を下げていた。

王の入室と共に楽師達が音楽を奏で始めた。女性達は王の凛々しい姿を見て、誰もが感嘆の声をあげる。——ただし私を除く。

自分が注目されていることに、王は慣れきっているのだろう。堂々たる様子で椅子に腰かけた。

「続けよ」

そして王の一言で、夜会が再開される。女性達は色めきだち、チラチラと王に熱い視線を投げて

いた。王の座る椅子の隣は王妃の座。誰もがその座を狙っているのだと、女性達の視線の先を見て思う。まるで椅子取りゲームみたいだ。

流れている音楽に乗ってダンスを踊ったり、雑談したりと、皆楽しそうに過ごしている。私はというと壁によりかかり、ため息をついていた。

いたくない場にいれば時間を長く感じるもので、先程から時計を見ているけれど、ちつとも針が進まない。ああ、退屈だ、そう思っつてふと王座を見ると、王と目が合った。

一瞬たじろぐも、まさかそんな、王が私を見ている訳などないと思ひ直す。たまたま視界の端に入っただけ。私は、自分の方から視線をそらした。

しばらくすると、侍女の一人がトレイを持って近づいてくる。トレイの上には、ワイングラスが並び、そこには綺麗な赤い液体が入っていた。人々の熱気に包まれて、少し喉が渇いていた私は、ありがたくグラスを手を取った。周囲を見れば、女性は皆このグラスを手をしている。

ある女性はトレイに載ったグラスを注意深く見ていて、ある女性はグラスを手にしたまま、まるで祈るようなポーズを捧げている。自分が手にしたグラスに目を向けるも、いたって普通のワイングラスにしか見えないが。

なんだというのだ。もしかして毒が入っているともいうのか、これに。若干訝しんでグラスを見るも、これといって怪しい点はない。周囲を見れば皆口になっているし、私も右に倣えとばかりに飲むことにした。赤い液体は初めて口にする味。果実の甘さを感じると同時に、ほんのりと口の中にアルコールの香りが広がった。

もしかして、これお酒……？ 私は顔をしかめた。お酒を口にするのは初めてだ。未成年だから当たり前だけだ。

どうしよう、故意ではなかったとはいえ、お酒を飲んでしまった。まずったなど思いつつ、手にしたグラスを見ると、あれっ？ と思う。

空になったはずのワイングラスに、何か光る物が入っていた。不思議に思って顔を近づけてみると、それは赤く輝く宝石だった。

なぜ、こんなところに宝石が入っているの？ 侍女の誰かが女性達のアクセサリーを用意している時に、誤って落としてしまったのだろうか。

この宝石をどうすればいいのか悩んでいる私の側を、ちょうど一人の侍女が通りかかったので、声をかける。

「すみません。ワイングラスの中にこれが……」

手にしたグラスを侍女に見せると、彼女は口を小さく開けた。

「まあ、おめでとうございます」

おめでとうございます？ もしかして、このグラスはビンゴみたいな余興で、宝石は当たった人の物なの？ だとしたら私はすごく運が良くないか？ 当たりの数がどれくらいなのかはわからないけれど。

しかし、これだけの大きな宝石を売りさばいたら、いくらになるのだろうか。私は素直に喜んだ。すると、私のすぐ横にいた女性が、いきなり私の腕を掴んだ。

「お願い！」

「はい!？」

急なことだったので、焦った私はグラスを落としそうになった。しかし、私の腕を掴んだ女性はそんなことはお構いなしに詰め寄ってくる。

「そのグラスを宝石ごと私に譲って!!」

「ええ?」

綺麗な女性の目は血走り、表情は真剣そのもの。そんなに価値があるものなのだろうか、この宝石は。だったら私もあげたくないのが本音だ。宝石自体にはなんの興味もないけれど、売れば金になるとなれば話は変わってくる。

「む、無理です」

「もちろん、ただでとは言わない、あなたの言い値で買うわ!!」

おっと。今の発言で、だいぶ心が揺らいだ。しかしこの女性が、ここまでこの宝石に執着する理由は何？ そんなに価値があるものなの？ 逆にそれが聞きたくなくなってくる。私は尋ねてみようと思いい、口を開こうとしたが――

「宝石の譲渡は禁止されています」

いつの間にか側に立っていた男性に注意された。

細身の体に高い身長、涼しげな切れ長めの瞳と、薄い唇。栗色の髪は、さらさらしている。年齢は二十代半ばぐらいだろうか。眼鏡をかけていて知的に見える。優しげな笑みを浮かべているが、

眼差しは決して有無を言わせない強さを持っていた。

「イマール様。わ、私は、ただ……!!」

「ここであなたに当たらなかつたということは、ご縁がなかつたのでしょうか。次の機会を待つことです」

そう言われた女性は一瞬泣き出しそうになるも、背を向けてこの場から走り去った。

何だっただろう。この宝石の意味することって、いったい……

不思議に思つて周囲を見回す。その時に初めて、自分が注目されていることに気付いた。

それも好意的な視線ではない。女性達から感じるのには、あきらかな敵意。その理由がわからず、身がすくむ。

固まっている私に、イマール様と呼ばれた男性が声をかけてきた。

「こんばんは。私の名前はイマール・ラディスといいます」

「ア、アオイです」

この人は私に、何の用事があるのだろう。私はただ戸惑っていた。

「改めまして、今夜の幸運を引き当てましたこと、おめでとうございます」

「あの、幸運って……」

イマールさんは、丁寧な挨拶をしてくれたが、正直それどころじゃなかつた。

彼は私の問いかけに、おやとばかりに、眉を上げた。私の表情を見て、私が何も知らないと察してくれたようだ。

「果実酒の中に、赤い宝石が入っていましたよね？」

「ええ」

私がグラスを見せると、イマールさんは微笑んだ。

「それが今夜の幸運の証です」

そりゃ、ただで宝石がもらえれば嬉しいさ。だけど、この周囲の空気を感じれば、絶対それだけじゃない。

「あの、幸運とは……?」

おやおずと切り出した私に、イマールさんは答えてくれた。

「今夜の王のダンスのお相手ですよ」

そう言われた瞬間、私は強い衝撃をくらった。なんとというクジを引いてしまったのだろう。

やっぱりね、ただでうまい話なんてある訳がない。宝石当てたら、王とダンスという、いらぬおまけがついてきた。

「む、無理です!!」

気が付けば私はそう叫んでいた。イマールさんは器用に片肩だけ動かす。

「私、ダンスなんて踊ったことがないのです！」

後宮に入っている貴族の娘は、一般教養としてダンスが踊れるのだろうか、私はそんな練習すらしたことがない。

「大丈夫ですよ。王がリードして下さると思います」

イマールさんは穏やかに笑うけれど、そんなレベルではない。無理難題を吹っ掛けるな。そうだ、今からこの宝石を先程の女性に譲ろう。そう思い顔を上げた瞬間、強い視線を感じて、そちらの方に体を向けた。

その先にいたのは、王だった。遠い王座からでも、私とイマールさんとのやり取りが見えるのだろう。その強い視線を向けられて、逃れることが出来ないのだと知る。

「さあ、王のもとまで一緒に歩きます」

そう言っただけでイマールさんは私と並んで歩き出す。歩いている間も、周囲の女性からの鋭い視線をひしひしと感じた。

数段高い場所にある王座の前までたどり着くと、王は頬杖をついたまま私を見下ろす。

『王のダンスのお相手を選ばれるなんて、光栄ですわ』

本来ならこんな風にお世辞の一つでも言うべきなのだろうけど、私には出来ない。誰かお手本を見せてよ。

何の興味もなさそうな眼差しを私に向けている王。さらに皆が私の出方を見ている。

そうだ、先に正直に白状しよう。先程の女性の様子からいって、他にも踊りたい女性はたくさんいるはずだ。それならばその権利をお譲りしたい。

勇気を出して、震える声で何とか言葉を吐き出した。

「ダンスが踊れません」

すると、しばしの沈黙が続いたあと、頬杖を外した王が腕を組み、私を顎で指す。

「……で？」

「で、とは……？」

「お前がダンスを踊れないから、なんだと言うのだ」

「え、ですから、他の……」

はつきり言葉にはしていないけど、そこは察して欲しい。

まさか王がこうくるとは思わず、なんて返事をすればいいのか悩む。結局、正直に伝えることにした。

「他の女性と踊って下さい」

——宝石の件だけは、どんと任せておけ。

そんな気持ちを込めて口にする。すると王は鼻で笑ったあと、踏ん返り返って言った。

「悪いが俺は、人に指図されるのが大嫌いだ」

なんたる暴君……!!

美麗な顔を意地悪く歪め、楽しそうに笑う王は、立ち上がり、こちらへ向かってくる。

「踊れないのなら、無理矢理にでも踊らせてくれるわ」

「え……ちよっ……!!」

そう言っただけで強引に私の手を引き、広間の中央へと進む。

本当にダンスなんてやったことがないのに!!

苦い顔をしていると王と向き合う形にさせられ、王の反対側の手が私の腰に回された。